

前期日程

平成 30 年度入学試験問題（前期日程）

国 語

（教育学部）

—— 解答上の注意事項 ——

- 1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。
- 2 問題冊子 1 冊と解答紙 2 枚がある。
- 3 問題は 3 問ある。（すべての問題に解答すること。）
- 4 問題の解答は、解答紙の所定の解答欄に記入すること。
- 5 問題冊子は持ち帰ること。

— 次の【文章Ⅰ】（上段）と【文章Ⅱ】（下段）は、ともに季刊誌『考える人』における特集「わたしの漱石先生」に寄せて書かれたものである。二つの文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、原文を一部改めたところがある。）（50点）

【文章Ⅰ】山田航「江戸情緒の残り火を求めて」

歌人にとって俳句とは、悪い人ではなさそうだが底の知れない隣人のような存在だ。素性を知らうとすればするほど迷宮のようである。近代短歌を作り上げたのが石川啄木とか斎藤茂吉とか地方出身の上京者ばかりであるのに対し、俳人には江戸っ子が目立つ。歌人は明治大正が好きだが、俳人は江戸時代が大好きらしい。NHKの朝ドラ好きか大河ドラマ好きかくらいの差が、短歌と俳句の間には横たわっている。

牛込生まれの夏目漱石も生粋の東京っ子だ。彼の俳句を眺めてみると、江戸文化への憧れがしばしば見える。

抜くは長井兵助の太刀春の風

漱石

明治30（1897）年の句。長井兵助とは浅草の大道商人の名前で、『彼岸過迄』にも出て来る。居合抜きで客寄せをし、歯磨きやガマの油を売っていた。江戸時代から代々その名を継ぎ、漱石の時代には五代目が活躍していたそうだ。明治の世とはいえ、江戸の香りを残す情緒にあふれた一句である。

漱石に俳句を教えたのは、東大予備門の同級生だった親友の正岡子規

【文章Ⅱ】中野京子「倫敦塔で見た幻」

一九〇五年、イギリス留学から帰った二年後、漱石は文藝機関誌「帝國文学」に『倫敦塔』を発表した。これは小説とも随筆ともつかぬ不思議な味わいの短編で、ロンドン塔という血塗られた過去を持つ古城を見学中、いつしか現実と幻想の境が溶解し、クランマー大僧正、ウォルター・ローリー、ガイ・フォークスなど、次々に歴史上の人物があらわれては消えてゆく様が、絵巻物のように展開する。

その時空の超え方と恐怖の味付けは、いかにも漱石らしく、『夢十夜』や晩年の幽体離脱体験にもつながっているよう。「塔」の見物は一度に限る」と書き、実際二度と訪れなかったのは、彼自身の鋭敏すぎる神経が耐え得なかったためか……。とはいえ官費で留学した知的エリートとしては、オカルトめいた現象を信じていると思われるのは本意でなかったのだろう。作品の最後でそれまでの雰囲気^Bに理性の冷水を浴びせるのはもちろん、言わずもがなの一文まで末尾に付け足している。

しかしそのおかげで、二つの幻影シーンにドラローシユの絵画が大きな影響を与えたことが明らかになった。一枚はウォレス・コレクション所蔵「ロンドン塔の王子たち」（オリジナルはルーブル美術館にあり、こちらはかなり小さめのヴァージョン）。もう一枚は、ナショナル・ギャ

だ。最初は友人同士の軽口のアオウシユウという感じで俳句のやりとりをしていたが、明治28(1895)年5月、当時松山中学校赴任中だった漱石は「小子近頃俳門に入らんと存候。」と子規に手紙で相談した。これ以降ふたりの関係は、こと俳句においては師弟となった。漱石が最も熱心に俳句に取り組んでいた松山時代の経験は『坊っちゃん』に生かされており、松山赴任が漱石にとって「江戸っ子」というアイデンティティを確認する機会になったことを想像できる。

江戸町人の息子だった漱石だが、本当の江戸文化の華やかさを直接には知らない世代だ。「硝子戸の中」で、年の離れた姉たちが派手な姿で猿若町へ芝居見物へ向かった話を兄からの伝聞として書いている程度である。松山藩士の息子で士族の生まれに誇りを持っていた子規が、漱石にとって「江戸精神」なるものの窓口だった。漱石は短歌に対してはほぼ興味ゼロだったが(全集には8首しか収められていない)、短歌はモダンな東京的文芸で、江戸的情緒に欠けているとみなしていたのかもしれない。

A
い。 漱石俳句のその後の影響をたどってゆくと意外な流れに突き当たる。

「漱石十弟子」のひとりに松根東洋城という俳人がいる。東京築地生まれだが中学時代は松山で過ごし、漱石に英語を学んだ。上京後、本格的に漱石に弟子入り。芭蕉を崇拜し俳諧精神を重視した東洋城の作風は、江戸的な艶と洒脱さに満ちている。美男子で柳原白蓮の恋人だったとも伝えられる東洋城。彼の孤高の生涯は石川桂郎『俳人風狂列伝』(1974)に詳しいが、生涯独身で住居もほぼ定めなかったそうだ。

ラリー所蔵『レイ・ジーン・グレーの処刑』だ。

前述したように『倫敦塔』は帰国後に書かれたので、実際の絵画を見て数年たっている。今と違い、よほどの有名作でない限り日本で再確認はできなかったろうから、メモを取っていたにせよ、もっぱら記憶が頼りだ。

漱石の描写を見てゆこう。

まずは王子たち。これは薔薇戦争末期、王位を奪おうとしたリチャード三世が、邪魔な甥(故兄王の息子たち)をロンドン塔へ放り込み、暗殺者を差し向けたというシェークスピアの戯曲(『リチャード三世』)をもとに描いた油彩画だ。漱石はベッドに彫られた葡萄の葉などの模様を詳細に記し、寄り添う二人の少年の様子をほぼ正確に説明しているが、絵のサイズが小さいせいか、左で聖書を掲げている子を兄と勘違いしている(実際は弟)。

また天蓋ベッドのカーテンをタペストリと見なしたのか、ここに刺客が隠れていることを仄めかす(この時向うに掛って居るタペストリに織り出している女神の裸体像が風もないのに二三度ふわりふわりと動く)——もつともこれは完全に絵から離れた、漱石の創作なのかもしれない。

ドラローシユは左端の扉へ見る者の注意を集めている。扉の下の隙間から明かりと人影が見え、兄弟の飼い犬が四肢をふんばり、危険を察知して吠えだしている。シェークスピアの原作には、登場してすぐのリチャード三世が、「そばを通れば、犬も吠える」と自嘲する台詞があるので、黒幕はリチャードとの暗示だ。なぜ漱石は犬について触れなかった

黛を濃うせよ草は芳しき

妻もたぬ我と定めぬ秋の暮

いかに細き雛の眉描く絵筆かな

東洋城

そしてその東洋城に師事したのが、浅草生まれの久保田万太郎。俳句、小説、戯曲とマルチに活躍したが、いずれにしても東京の下町を舞台に、失われゆく江戸情緒をテーマとしている。現代に広まっている(それこそ『男はつらいよ』や『こち亀』にもみられるような)いわゆる「下町情緒」というやつ原型を作ったのは万太郎だと言ってしまうといいだろう。

吉原の菊のうはさも夜寒かな

時計屋の時計春の夜どれがほんと

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

万太郎

万太郎は昭和9(1934)年より、俳壇の外で活躍する文人や実業家などを渋谷の旅館に集めた「いとう句会」にて宗匠をつとめた。参加者は、初代直木賞作家の川口松太郎、弁士の徳川夢声、映画監督の五所平之助、映画プロデューサーの森岩雄、帝国劇場社長の秦豊吉などなど……。彼らは俳句を通じて万太郎の美学を吸収し、映画や大衆小説や劇場やラジオやテレビといったポップカルチャーへと変換させて、日本中

のだろう。猫より犬の方が好きだったはずなのに、見落としたのだろうか。

もう一枚は、「九日間の女王」と呼ばれたジェーン・グレイ処刑囚。王位継承権を持つ身だったばかりに、野心的な夫と舅による陰謀に巻き込まれ、十六歳で斬首された史実が主題だ(「英国の歴史を読んだものでジェーン・グレイの名を知らぬ者はあるまい」)。美術館巡りを重ねていた漱石だが、この作品には特に強い印象を受けたようで、『倫敦塔』のクライマックスにもつてきている。

語り口は絵画のディスプレイションそのもので、曰く、「白き手巾で目隠しをして両の手で首を載せる台を探す様な風情」「雪の如く白い服を着けて、肩にあまる金色の髪を時々雲の様に揺らす」「毛裏を折り返した法衣を裾長く引く坊さんが、うつ向いて女の手を台の方角へ導いてやる」「台の前部に藁が散らしてあるのは流れる血を防ぐ要領」「背後の壁にもたれて二三人の女が泣き崩れて居る」「磨ぎすました斧を左手に突いて腰に八寸程の短刀をぶら下げて身構えて立って居る」。

ジェーンの悲運に寄せるアイセキは、漱石にしては珍しいソウシヨク過多の美文となり、曰く、「揉み躰られたる薔薇の蕊より消え難き香の遠く立ちて、今に至る迄史を緝く者をゆかしがらせる」。これは間違いないなくドラローシュの画力でもあったろう。「余はジェーンの名の前に立留ったぎり動かない。動かないと云うより寧ろ動けない。空想の幕は既にあいて居る」という文章もロンドン塔での出来事というよりむしろ、美術館でドラローシュ作品を前にした感動を語っているかに聞こえる。

漱石の幻視は、斧が振り下ろされるまで続き、「余の洋袴の膝に二三

に拡散させていった。特に五所平之助は松竹蒲田撮影所の監督だったのだから、『男はつらいよ』が万太郎の末裔＊まつえいというのは別段眉唾話でもない。

正統な師系といえるのはせいせい東洋城までで、万太郎や「いとう句会」のメンバーたちが漱石の孫弟子や曾孫弟子ひまと言われることはない。しかし、東京を原風景として、粋や洒脱の美学を追求しようという俳句の流れがあり、それが現代のポップカルチャーにまで一部流入しているのだとは言えると思う。その源流で漱石が存在感を示していることは、見過ごせない事実だ。

東洋城も万太郎も、明治生まれである。本当の江戸なんて知らない。知らないからこそわずかな残り香から「江戸幻想」を立ち上げられた。幕末生まれの漱石だって、本当の江戸は知らなかった。だからこそ、落語や大道芸に魅入られたのと同じように、江戸文化としての俳句に惹きつけられたのだと思う。漱石、子規、東洋城、万太郎……。一人のキャスでも欠けていたら「下町情緒」なるものは現代に存在していなかったかもしれない。漱石俳句にみられる「江戸幻想」は現代の日本文化に、今も息をヒソイめている。

注 牛込、浅草、猿若町、築地、吉原、渋谷……いずれも東京の地名。猿若町には多くの歌舞伎劇場があった。

大道商人……大道のかたわらに品物をならべて商売をする商人。

露店商。

居合抜き……長い刀を瞬時に抜いて見せる芸。江戸時代、商品を

点の血が迸ほとばしると思つたら、凡すべての光景が忽然こつぜんと消え失せた」。その後、「自分ながら少々気が変だと思つてそこそこの塔を「去つたのだそうだ。

注 ロンドン塔……ロンドン市内東部、テムズ川河畔にある城砦じやうざい。

ウィリアム一世が一〇七八年に築いた白塔(現在のロンドン塔内主塔)がその起源といわれる。のち、牢獄ろうごくに転用されて、政敵や反逆者とされた王族・貴族などが幽閉された。漱石は、ロンドンに到着してすぐ(一九〇〇年十月)、ここを見物した。

克蘭マー大僧正……イギリスの宗教改革者。

ウォルター・ローリー……イギリスの軍人、探検家。

ガイ・フォークス……昔イギリスで起きた火薬陰謀事件の首謀者。

幽体離脱……魂が肉体から抜け出るとされる現象。

ドラローシュ……フランスの画家。歴史画や肖像画を多く描いた。

ウォレス・コレクション……イギリス、ロンドンにある美術館。

ルーブル美術館……フランス、パリにある国立美術館。

ナショナル・ギャラリー……イギリス、ロンドンにある国立美術館。

薔薇戦争……イギリスの内乱。王位継承をめぐる、ヨーク家と

ランカスター家とが一四五五年から三十年間争った。その末

期、リチャード三世(故エドワード四世の弟)は、甥の二人

売るための大道芸として演じられた。

ガマの油……江戸時代に傷薬として使われた軟膏剤。

東大予備門……東京大学予備門。東京大学に入学しようとする生徒にあらかじめ予備教育を施す機関としてつくられた学校。

洒脱……俗気がぬけてさっぱりしていること。

柳原白蓮……東京生まれの歌人。

石川桂郎……俳人、小説家。

黛……眉を墨でかくこと。また、その墨や眉のこと。

『男はつらいよ』……山田洋次原作の人情喜劇。東京の下町を舞台の一つとする。もともとテレビドラマとして放送されたもの

が、松竹キネマ(映画会社)で映画化された。

『こち亀』……秋本治作の漫画『こちら葛飾区亀有公園前派出所』の

通称。東京下町の派出所に勤務する警官が主人公。

宗匠……文芸・技芸にすぐれ、師である人。師匠。

弁士……無声映画の時代、映画の筋の展開に合わせ、声色などを

つかってその内容などを説明することを業とした人。

末裔……末の血統。子孫。

(故エドワード四世の息子たち)をだまして即位した。甥の二人は塔内に幽閉され、一四八三年に暗殺された。

天蓋ベッド……天蓋(一般に四本の柱で支えられた屋根状のもの)の付いたベッド。

タペストリ……羊毛や絹、麻などを材料として、絵模様を織り出した綴織。また、その壁掛け。

ジェーン・グレイ……イングランド史上初の女王として即位したが、在位わずか九日間で廃位され、夫とともに処刑された。

デスクリプション……description(英) 説明。

要領……「用心」に同じ。

問一 傍線部ア～エのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部A「漱石俳句のその後の影響をたどってゆくと意外な流れに突き当たる」とはどういうことか。【文章I】の全体を踏まえて、百字以内で説明しなさい。

問三 傍線部B「作品の最後でそれまでの雰囲気」に理性の冷水を浴びせるのはもちろん、言わずもがなの一文まで末尾に付け足している」について、次の

(1)～(3)の問いに答えなさい。

(1) 「それまでの雰囲気」とはどのような雰囲気か。本文中の語句を用いて簡潔に説明しなさい。

(2) 「理性の冷水を浴びせる」の本文中における意味を、簡潔に記しなさい。

(3) 「言わずもがなの一文まで末尾に付け足している」とあるが、『倫敦塔』の「末尾に付け足して」あるのはどのような内容の文章だと考えられるか。

【文章II】の全体を踏まえて、百字以内で推測して書きなさい。

問四 【文章I】と【文章II】のそれぞれについて、文章中で対比されているものを挙げ、その対比がどのような効果を上げているか説明しなさい。

問五 二つの文章からどのような漱石像がうかがえるか。【文章I】と【文章II】を関連づけて、あなたの考えを百二十字以内で記述しなさい。

二 次の文章は『住吉物語』の一節である。「」の部分で踏まえて本文を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変した箇所がある。)(30点)

中納言の娘(＝姫君)は、継母が自分を七十歳ほどの男と無理に結婚させようと企んでいるのを知り、密かに都を離れて侍従とともに住吉にいる尼のところへ逃げようと考えている。そんな姫君の所へ、継母の娘で義姉妹にあたる中の君と三の君が訪ねてきた。この二人と中納言は継母の計略を知らない。

中の君、三の君、渡りて、「いかに、常に、うつぶしがちには」など聞こゆれば、「この程は、いかなるべきにか、世の中もあぢまなくて、消えも失せまほしき程になん。もし、さもあらんには、おほし出でなんや」と、袖も所狭く、のたまへば、「あな、まがまがし。さ、何しにか、さる事はあるべき。侍従の君、いかに恋しくおはせん」と言へば、侍従、「いかならん世までも、たれか。忍びさぶらはんなど思ひ侍るに、御たはぶれながらも、あはれに忘れがたく」とて、思へる事の、涙をすすめて、侍従、

命あらばめぐりやあふと津の国のあはれ生田の森に住まばや

と口ずさみて、人目あやしき程にぞありける。中の君、物のあはれを知り給へば、その事となく涙をのごひあひ給ひけり。姫君、「露の身のはかなさは、かやうなる程に、いかが」など聞こゆれば、中の君、

契りてぞ同じ草葉に宿るらんとぞ消えん夜半の白露

と言ひ給へば、姫君も侍従も、いとど涙もよほされて、別れん事を悲しと思ひけり。中の君、三の君、「何となく世のはかなさをあはれと思ひ、常は心を澄ましておはする人なれば」と、大方のことを思ひて、おのおの帰りに給ひけり。

*心寄せの式部、隙もあれば立ち寄りて、「たばかり給ふ事、近くこそ。いかにせさせ給ふべきにか。いとあはれにこそ」と聞こゆれば、「かやうにおはしたる事の忍ばしさよ。いかならん世までもこそ、おもひ侍れ」とあれば、「誠に、かくてさぶらへども、御方を頼みこそ奉りつるに、いかにならせ給ひなんずるにか」とて、^①うち泣きけり。

さる程に、住吉の尼君、上りて、「かく」と告げければ、「暮るる程に、忍びたる車奉り給へ」と、言ひ返して、その程に、見苦しき物ども、取りしたためてけり。心の中、いかばかりあはれなりけむ。その時しも、中納言、渡り給ひたりければ、さりげなくおはしけれども、「この度ばかりこそ。見奉り侍らんずらん」と思ひければ、忍びがたき色もあらはれて、顔に振りかけたる髪の際より涙もり出づるを、^②見給ひて、「いかに。母官の事をおぼすにや、乳母の事、ゆかしとおほし出づるにや、又、兵衛の事を心づきなくおぼすにや。ともかくも、何事にても、おぼさんやうに聞こえ給ふべきにこそ。

親の思ふばかり、子は思はぬ事の心憂さよ。いかばかりにか、あはれと思ひ侍る。頭の髪を筋ごとにとありとも、否ぶべき身かは」と、のたまへば、「母
宮の事も、又、乳母の事も思ひ侍らず。殿をも見奉らで程ふる事もやと、かなしく」など、言葉も聞こえぬ程に、泣く泣く聞こえ給へば、中納言、うち
泣き給ひて、「三条におはしますとも、まろが生きたらんほどは、離れきこゆべきにあらず。何かはその事をおぼす」とて立ち給ふを、今一度と、顔ふり
あげて見給ふに、目もくれ心も消ゆる程にぞありける。侍従とともにぞ泣き居給へる。

注 袖も所狭く……泣いている様子。

まがまがし……縁起でもない。

兵衛……父の中納言が、継母の計略とは別に、姫君と結婚させ

ようとしている相手。

生田の森……津の国(摂津。現在の大阪府と兵庫県の一部)にあ

頭の髪を筋ごとにとありとも、否ぶべき身かは……頭髮を一本

る森。「生く」と掛詞になっている。

ずつ数えろと言われれば数えるように、姫君のためな

心寄せの式部……継母に仕えているが、姫君に好意を持っている

ら難題であつてもやり遂げるといふ意味。

る女房。

三条……中納言が姫君と兵衛を結婚させて住ませようとして

たばかり給ふ事、近くこそ……継母たちの企みの実行日が近い

いる屋敷。

ですよ。

かくてさぶらへども……継母にお仕えしていますが。

御方……姫君。

取りしたためてけり……整理してしまつた。

問一 傍線部①～④の主語を文章中の語で答えなさい。

問二 次の文は波線部ア・イを文法的に説明したものである。()に適語を入れなさい。

ア 「る」は (1) (の助動詞) 2 「の」 3 (形である。

イ 「に」は (4) (の助動詞) 5 「の」 6 (形である。

問三 傍線部A「もし、さもあらんには、おほし出でなんや」を、「さ」の内容を明らかにしてわかりやすく口語訳しなさい。

問四 傍線部Bの和歌について、次の二つの問いに答えなさい。

(1) この歌は中の君のどのような気持ちを詠んでいるか、答えなさい。

(2) この歌を聞いて姫君と侍従が泣いているが、その涙を中の君と三の君はどのように解釈したか、説明しなさい。

問五 傍線部C「涙もり出づる」に表れている姫君の思いとはどのようなものか、説明しなさい。

問六 傍線部D「言葉も聞こえぬ程に、泣く泣く聞こえ給へば」という姫君に対して、中納言はどのように慰めているか、説明しなさい。

問七 傍線部E「何かはその事をおぼす」という中納言の言葉に対して、姫君はどのような気持ちになっていると考えられるか、説明しなさい。

三 次の詩は、唐の白居易が、数え年三歳で早世した娘のことを思い、作った詩である。よく読んで後の問いに答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省略したところがある。)(20点)

念^{おも}金^{きん}鑾^{らん}子^し

衰病四十身 嬌痴三歳女

非^{ザルモ}男^ニ 猶^①勝^リ無^{キニ} 慰^{メテ}情^ヲ時^ニ一^{タビ}撫^ナ

一朝捨^テ我^ヲ去^リ 魂影無^シ処^所

况^②念^ニ天^ノ化^ノ時^ヲ 嘔^{おう}啞^あ初^{メテ}学^{ビシラ}語^ヲ

始^{メテ}知^ル骨^ノ肉^ノ愛^ハ 乃^チ是^レ憂^ノ悲^ノ聚^{アフマリナルヲ}

唯^③思^ニ未^レ有^前 以^レ理^遣傷^苦

忘^レ懷^日 日^③已^久 三^度移^{セリ}寒^暑

今^日一^{タビ}傷^{いたムルハ}心^ヲ 因^④逢^{ヒシニ}旧^{もとノ}乳^母

注 金鑿子……白居易の娘の名。

処所……いどころ。

嬌痴……あどけないさま。

夭化……夭折。幼くして死ぬこと。

魂影……魂と姿かたち。

問一 傍線部①～④の文中における読み方をすべてひらがなで記しなさい。(仮名遣いは新旧どちらでもよい。)

問二 傍線部A「嘔啞」は擬音語である。どういう音を表すと考えられるか。擬音語を用いずに説明しなさい。

問三 傍線部Bは、どういうことを述べているのか。「骨肉愛」と「憂悲聚」がどのような関係にあるのかに注意して、わかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部Cについて、次の二つの問いに答えなさい。

- (1) 書き下し文に改めなさい。なお、「遣」は「やる」(追いはらうの意)と読むこと。(仮名遣いは新旧どちらでもよい。)
- (2) 作者は娘の死の悲しみをどのように乗り越えようとしたのか。「理」の指す内容を明らかにしながら答えなさい。

問五 傍線部Dに「忘れ懐」とあるが、作者は結局、「懐ひ」を忘れ去ることができたのか。最後の二句に言及しながら、答えなさい。